

東京 IPO 特別コラム

2019年3月22日 Vol.143

桜の開花とともに新元号相場への期待膨らむ

桜の開花が伝えられ、春爛漫の季節を迎えようとしている今、多くの投資家の皆さんの関心事は昨年12月26日をボトムに、海外株高を背景に戻り歩調を辿る株式相場の行方かも知れません。米中貿易摩擦に起因した中国経済の頭打ちが伝えられるとともに中国向けの輸出に影響が及び輸出企業の業績が悪化する事例も見られ、日本の景気は既に後退局面に入ったのではないかとの見方がなされている。そうした見方が影響したのか、配当取りシーズンにも関わらず日本の株式相場は米国株に比べるとやや頭重い展開が見られる。

景気の先行きとともに企業業績の先行き不透明感が漂う中では全体相場は頭重い展開にならざるを得ないが、創薬ベンチャーやテーマ銘柄への物色人気が高まるなど業績とは余り関係のない個別銘柄には市場のリスクマネーが集まりやすくなっている。また、短期資金が集まりやすいIPO銘柄も関心の的となっているので本コラムの読者の皆さんは念入りのチェックでむしろ忙しい日々が続きそうだ。

また、今年は今上陛下の生前退位による皇位継承に伴って5月1日より新たな元号が始まることになる。平成から一体どんな元号に代わるのか国民の関心が高まっている。新元号は4月1日に発表予定で株式市場もポジティブな話題として捉えることになると考えられる。言わば新元号相場への期待が桜の開花とともに高まるのではないかという筆者の勝手な楽観的な見通しが当たるかどうかはともかく、慎重なスタンスを貫いてきた投資家の心理に多少は積極さをもたらすのであれば幸いだ。そうした楽観的な見通しの一方で、4月27日から5月6日にかけての10連休をリスクだと危惧する向きもあり、既にそうしたリスクを感じる投資家はキャッシュポジションを高めるなどの備えをしているようにも見受けられる。ボトムから3か月を経た3月27日の配当落ち後の株式相場は国内外の様々な経済要因で波乱を生じるとの見方がある一方で、皇位継承のイベントの最中に波乱は起きず、むしろ日本の株式市場では新たな時代への期待感が高まるとの見方もできるのではないかと考えられる。

米中貿易摩擦や英国のEUからの離脱問題など海外からの懸念材料に加え、マクロ企業から発信されるネガティブな情報を受けて多くの銘柄が調整を余儀なくされたが、そうした調整が一巡する一方で、さしたる悪材料が出ている訳でもなく、配当落ちを前に、訳もなく換金売りに押されてきた銘柄も多い。新たな決算期における業績向上とそれに伴う株価の割安感、増配による配当利回りのアップ、継続的な自己株買い、前向きな中期計画の具体化、IRの積極化などのポジティブ要因を背景に配当落ち後の株式市場には新年度入りで新たな運用資金も入りやすく需給面も味方してくれそう。これまでやや停滞気味だった株式相場には大いに見直しの余地があるのではないだろうか。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)